

学校の組織化の研究 —教育実践記録による—

矢野 弘(山吹学)

1. 問題

学校教育は「教育・実践」と「組織・運営」とを関連付け、学校の在り方について探求を試みている。そこには2つの立場が認められる。ひとつは学校組織が管理や経営の論理ではなく、教育の論理によって貫かれるべきとの主張である。もうひとつは教育機能(教育力)強化のため組織の統合(組織力)を強化すべきとの主張である。

この2つの主張は基本原則はひとつであると理解される。つまりこれは教育の論理を貫く学校の組織化である。本発表はこれを主題とする。そして「教育実践」と「学校の組織化」の相互関連性を追究することとする。

ところで組織一般の研究は、組織化とは相矛盾する2つの原理が機能するという。「統制主義」と「合意主義」である。これを学校の組織化としてみれば「官僚制化による組織化」と「教師の集団化による組織化」ということとみるであろう。したがって学校の組織化とは原則的には相矛盾する2つの組織化の統合ということになる。本発表のいうのはこのことである。しかし組織化を問題とするか否か、この問題とは無関係ではありえず、本発表の視角から必然的に教師の集団化が明らかとなるであろう。

次に主題に切り込む方法について示しておく。学校がある教育課題に取り組み、教育実践によって解決してゆく過程を直接の対象とした。そのようにすることで、教育実践にたどるべき展開である学校の組織過程が浮き彫りされるからである。換言すれば、組織レベルで生じる教育過程が把握されるのである。

そして組織過程は多数の教師によって作られるもので、ポイントは必然的に教師の集団化が明らかになる。

そこで本発表では、学校の組織レベルでの「教育課題解決の過程」と「教師の集団化過程」を統合してとらえられる。ただし、これは基本原則は「分析モデル」の提示と、それによる「教育実践記録」の分析によるのである。つまり「教育の論理を貫く学校の組織化」の論理を概念的に明らかにするため「分析モデル」を構築した。そしてこの分析モデルを分析対象として「教育実践記録」を分析した。

2. 教育課題解決の過程

このモデルは次のステップを示し、構築された。

① 教育課題解決の過程

これは「フェーズ運動」としてとらえることができる。

③いくつかの教育問題が次々発生し、そのなかからある問題が教育課題として選択される。

④それが正しく教育課題として承認され、その解決のための方針が決定される。

⑤その方針を実行に移すための調整体制が組織化される。

⑥それを基盤と課題解決と直接取り組む教育実践が展開される。

② 学校組織の4部内

この一連の過程を学校組織は4部内で分割して担当することになる。過程をアウグメント・インダットの交換過程として整理したものの

